

[グラウンドカバープランツ生産における病害虫管理技術の開発]
新病害, キチジョウソウ, アマドコロおよびグミに発生した炭疽病

竹内 純・鍵和田 聡*・竹内浩二
(安全環境科・*東京大学)

【要 約】 3種グラウンドカバープランツに発生した葉枯れ症状の原因究明を行ったところ, キチジョウソウ, アマドコロは*Colletotrichum dematium*, グミは*C. gloeosporioides*による新病害であり, いずれも病名として炭疽病を提案する。

【目 的】

カバープランツ生産圃場においてキチジョウソウ*Reineckea carnea* (ユリ科), アマドコロ*Polygonatum odoratum* (ユリ科) およびグミ (斑入り品種:ギルトエッジ) *Elaeagnus × ebbingei* cv. Gilt Edge (グミ科) に未知の葉枯れ症状が発生した。そこで, これらの病害の病原菌を同定し, 診断および防除対策に資する。

【方 法】

1) 発生状況調査。2) 病徴の再現試験, 病原菌の特性・同定および病名の提案。

【成果の概要】

1) キチジョウソウおよびアマドコロの葉枯れ症状

両植物とも施設および露地でのポット栽培で発生した。また同症状はそれぞれの植栽においても確認された。葉身に暗褐色～灰褐色, 不整形の病斑が拡大, 葉枯れを起こした(図1)。病斑部には黒色小粒(分生子層)が多数形成された。各分離菌接種により病徴が再現, 接種菌を再分離された。両病害の病原菌の形態は類似し, いずれも分生子は無色, 単胞, 鎌形, キチジョウソウ分離菌株(R)は $9.5\sim 28\times 2.5\sim 5\mu\text{m}$, アマドコロ分離菌株(P)は $10\sim 27\times 2.5\sim 4\mu\text{m}$ 。付着器は暗褐色, 棍棒形で切れ込みが多く, 多様な形状, (R) $7.5\sim 30\times 5\sim 14\mu\text{m}$, (P) $7\sim 26\times 5\sim 12\mu\text{m}$ 。両菌とも菌叢は $10\sim 37^{\circ}\text{C}$ で生育, 生育適温は $25\sim 30^{\circ}\text{C}$ であった。またキチジョウソウ分離菌株はr-DNAのITS領域における系統解析により*Colletotrichum dematium* (Persoon:Fries)Groveと同じクレードに含まれた(図2)。以上の結果から, 両病原菌とも前記種と同種と同定した

2) グミの葉枯れ症状

露地ポット栽培で発生した。葉身に暗褐色～灰褐色, 不整形の病斑が拡大し, 葉枯れを起こした(図3)。病斑部には黒色小粒(分生子層)が多数形成された。分離菌接種により病徴が再現し, 接種菌が再分離された。分生子は無色, 単胞, 楕円形～長楕円形, 円筒形, $10\sim 22\times 4\sim 6\mu\text{m}$ (図2)。付着器は, 暗褐色, 不整棍棒形で, 切れ込みが多く $7.5\sim 19\times 4\sim 13\mu\text{m}$ 。菌叢生育は $10\sim 35^{\circ}\text{C}$ で認められ, 生育適温は $25\sim 27^{\circ}\text{C}$ であった。病原菌を*Colletotrichum gloeosporioides* (Penzig) Penzig & Saccardoと同定した。

3) まとめ: 以上の3病害は本邦未記録の病害であった。それぞれ病名として炭疽病(Anthracnose)を提案する。病原菌は罹病部に豊富に菌体形成をするため, 防除対策として, 発病葉の早期除去による菌密度の低下を推奨する。(関東病虫研報第55集投稿予定)



図1 キチジョウソウ (左), アマドコロ (中央) の病徴および病原菌の分生子 (右), 付着器 (枠内)
(Bar:20 μ m)

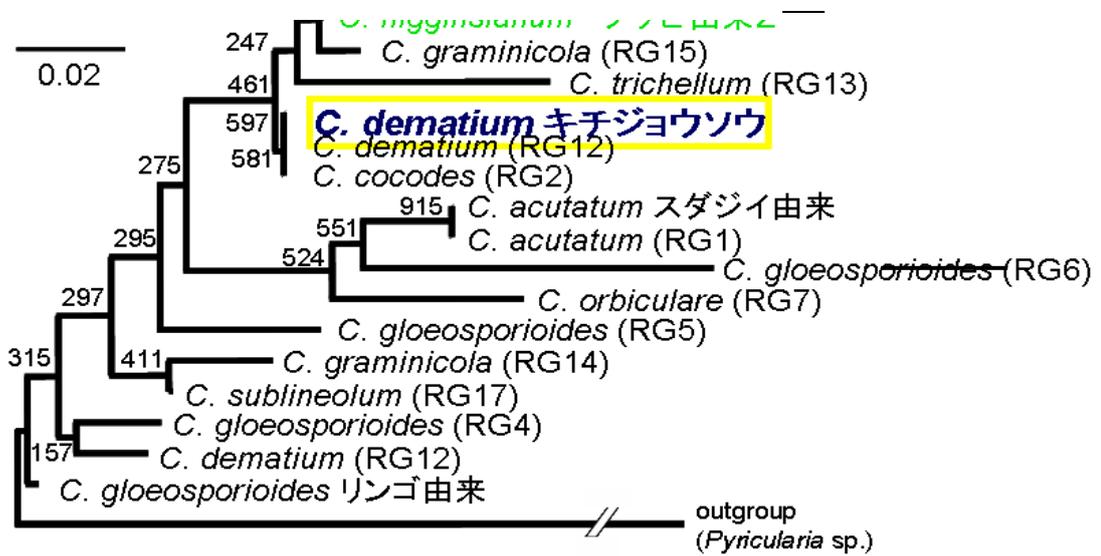


図2 キチジョウソウ炭疽病菌のr-DNA・ITS1における系統解析



図3 グミの葉枯れ症状 (左) および病原菌の分生子 (中央) と付着器 (右)

(Bar:20 μ m)